

分科会E

日本文化としての服飾

王朝和歌にみられる服飾表現

—「からころも」について—

和田 早苗

日本服飾史において、平安時代中期は、奈良時代の唐風服飾から平安時代後期の和様の整った服飾への過渡期として位置づけられているが、この時期の服飾の様相をとらえることは、実物遺品はもとより絵画資料も少ないため大変困難であることが現状となっている。

限られた文献資料の中には正史や制令、和歌や物語などの文学作品がある。正史や制令などは服飾の制度的な面を伝える資料であり、これに対して文学作品には人々と服飾との関係が描かれていて、心情的な面を読み取ることができる資料であるといえる。その中でも、和歌は人々の意志伝達手段の一つであり、三十一文字という制約された文字数の中で用いられた歌ことばには、詠み手の少なからぬ思いが込められていると考えられる。ここでは、「からころも」ということばに焦点を当てて、人々が服飾に託した心情を追究していく。

「からころも」はその名称から「から（唐あるいは韓）」の服飾がもとになっていると思われることばで、正史や制令などには見られず、文学作品中でも歌の中にのみ用いられている。十世紀末に成立した類題和歌集『古今和歌六帖』第五帖「服飾」には「なつ衣」「かりころも」などは独立した項として扱われているのに対して「からころも」という項はなく、「ころも」の項の中などに含まれている。

「からころも」の実態は明らかではないため、辞典や注釈書では、『万葉集』で用いられた場合は、中国風の、袖が大きく裾はくるぶしまで届き、上前と下前を深く合わせて着る裾の合わない服であると考えられ、中国の漢代における深衣⁽¹⁾のようなものと解釈されている。そして、平安時代の用例では、衣に関する語を導き出す枕詞、あるいは、万葉期の「からころも」を「めずらしく美しい衣服」と定義した上で、転じて衣服の歌ことばとして用いられた、ととらえられる傾向にある。また、この言葉を枕詞と考えるか、あるいは衣の実体と考えるかの区別は明確ではなく曖昧にとらえられている。

しかし、『万葉集』で用いられた「からころも」について、明確に形態を特定することができる根拠があるわけではなく、また、平安時代の「からころも」を用いた歌に注目してみると、めずらしく美しい衣服というよりもむしろ肌身に近くまとう私的な衣であり、従来の説とは違う衣である可能性が浮かび上がるるのである。

本研究の目的は、「からころも」の形態を特定することではなく、「からころも」から想起される共通の感情を探り、従来、感情面よりも枕詞や衣の歌語といった技術的な面で解釈されている平安時代の「からころも」をとらえ直して、人々がその衣に込めた心情や歌における意味を明らかにすることにある。

まず、平安時代の「からころも」についてみていく上で、前代の『万葉集』における「からころも」

が人々に想起させる心情を探り、平安時代におけるその心情の変遷をたどっていき、次に「からころも」と、衣を砧で打つ「擣衣」との関係について、最後に『源氏物語』末摘花の用いた「からころも」について考察する。

1. 「からころも」の変遷

『万葉集』では六首に「からころも」が詠まれていて、衣の実体に即して用いられていると思われる歌は次の四首である。（「可良己呂武」は「からころも」の訛と考える。）

朝影アサカゲ 命身者成ミタマヒナリス 辛衣カラコロモ 繾之不相而スソノアハズテ ヒサシクナレハ 久成者(カラコロモ) (十一・2619)

辛衣カラコロモ 君介内着キミニウチキモ 欲見ミマコホリ 戀其晚師之コヒソクラシシ 雨零日平アメノフルヒラ (十一・2682)

可良許呂毛カラコロモ 須蘇乃宇知可倍スソノウチカヒ 安波祢杼毛アハミドモ 家思吉己許呂乎ケシキヨコロヲ 安我毛波奈久介アガモハナクエ (十四・3482)

或本歌曰、可良許呂母カラコロモ 須素能宇知可比スソノウチカヒ 阿波奈敵婆アハナヘバ 須奈敵乃可良介カラモコトタカリツモ 許等多可利都母モトタカリツモ

可良己呂武カラコロモ 須宗介等里都伎スソニトリツキ 奈苦古良平ナクコラヲ 意伎豆曾伎怒也オキテソキスヤ 意母奈之介志弓オキナシニシテ (二十・4401)

ここで注目したいのは、「からころも」がどのような語にかかっているのかということよりも四首共に自分と逢えない人のことを嘆く気持ちを詠んでいるということである。このことは、「からころも」の特徴は、上前と下前を深く重ね合わせることではなく、むしろ、裾の縫合が重なり合わないことであり、人々はその重なり合わない左右の縫合を自分と逢えない人になぞらえていたことを示しているのではないだろうか。つまり、「からころも」を用いることによっていといしい人に「逢えない」気持ちを効果的に詠み込んでいるのである。また、衣によって「逢えない」気持ちを表すことは、『万葉集』における他の衣の表現にはみられないものであり、「からころも」独自の特徴であると考えられる。

さて、平安時代の「からころも」として、まず六歌仙時代の、『伊勢物語』第九段にも採用されている在原業平の歌をみていきたい。

唐衣着つゝなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしづおもふ（『古今和歌集』羈旅歌・410）

三河国八橋で川のほとりに美しく咲いているかきつばたをみて、「かきつばた」という五文字を句の頭に据えて旅情を詠むように言われて詠んだ歌である。衣に関する縁語が多用されているため、「からころも」は衣に関する縁語を導くための枕詞、あるいは衣の歌語であると解釈される傾向にある。しかし、『伊勢物語』では物語の展開に服飾が関連して心情・状況描写の役割を担っている場合が多くみられ⁽²⁾、また、旅立った主人公からみると、都に残してきた妻は逢えない人である。これらのことを考え合わせると、この歌における「からころも」は、先に述べた心情、すなわち「逢えない」気持ちを表しており、「からころも」には妻を恋しく思う気持ちが託されていたと言えるのではないだろうか。そして、この歌の「からころも」は体になじんでいく衣、つまり肌身に近く内側にまとう「内衣」であると考えられる。

業平の歌は、後世の和歌・物語に大きな影響を与えているため、この歌から連想される心情は後世の和歌に影響を与えていったことと思われる。

平安時代中期以降「からころも」は主として恋の歌で多く用いられている。例えば、

君こふる涙しなくは唐衣むねのあたりは色もえなまし（『古今和歌集』恋歌二・紀貫之・572）

唐ころもほせど袂の露けきは我が身の秋になればなりけり（「寛平御時后宮歌合」108）

これらの歌では、恋に煩悶し、いといしい人に逢えないために流れる涙に濡れる衣として用いられている。

このように『古今和歌集』成立期までは、「からころも」から想起される「逢えない」という心情が踏襲され、いとしい人に「逢えない」気持ちを歌の中で効果的に表していることが窺われるが、次第にそのような気持ちを表すことは薄れていく。

かりそめにそめざらましをからころもかへらぬいろをうらみつるかな

(『伊勢集』366)

と見られるように、衣の歌ことばとして用いられることが多くなり、また、

こひしくはきてならせとてから衣我が身のしろにぬぎてやるかな

(『嘉言集』134)

このように「着襲れること」と「恋人と馴れ親しむことを」を掛けた表現も多くみられるようになる。しかしながら、襲れる服の表現としての「からころも」は外側にまとう「外衣」ではなく、業平の歌と同じく肌身に近く内側にまとう私的な「内衣」のことを示しているのである。

2. 「擣衣」の心情と「からころも」の関係

紀貫之(872頃-945年)は、多くの歌に「からころも」を用いている。その中でも「擣衣」を詠んだ和歌に「からころも」を用いていることは注目すべきことである。「擣衣」の歌に「からころも」を用いたのは管見に入る限り貫之が最初であり、貫之以降は頻繁に用いられるようになる。このことは、「擣衣」が元々漢詩の題材であることと「からころも」の「から」が結びついたという言葉の面での結びつきだけではなく「からころも」から想起される心情と「擣衣」の題に込められた心情に通じるものがあつたことを表していると思われる。そこで、「からころも」と「擣衣」の含む心情の共通する部分を明らかにしていきたい。

「擣衣」とは、「布帛をしなやかにし、又つやを出すためにきぬたにのせて槌でうつこと」(諸橋轍次『大漢和辞典』大修館書店)で、六朝以来の漢詩の題材である。

『白氏文集』『聞夜砧』は、

誰家思婦秋擣帛 月苦風淒砧杵悲

八月九月正長夜 千聲萬聲無了時

應到天明頭盡白 一聲添得一莖絲

秋の寒い夜長に、妻が旅する夫を慕い、砧を打つ音が止むときなく響きわたっている光景である。『和漢朗詠集』では「擣衣」に初二連が引かれている。

このように「擣衣」は、遠征中の夫を待つ妻の晩秋・初冬の夜仕事で、夫への思慕を表し、響きから寂寥感をかもしだす題材である。

李白や白居易の詩は我が国に早くから伝わり、文学界にも大きな影響を与えた。『文華秀麗集』(818年成立)などに「擣衣」の詩がみられる。

また、『源氏物語』「夕顔」巻には、源氏が中秋の夜、夕顔の家に泊まり、明け方近くに近所から「白妙の衣打つ砧のをと」などが聞こえてきて、夕顔亡き後、源氏は砧の音を思い出し、「まさに長き夜」と『白氏文集』の詩の心情をもって夕顔のことを恋しく思い出す場面がある。

これらのことから、漢詩に詠まれる「擣衣」も『源氏物語』における「擣衣」も外側に着用する衣の光沢を出すために打つのではなく、柔らかくして着心地を良くするために衣を打つ行為であると考えられる。つまり、冬支度として「内衣」を打つ作業である。

貫之が詠んだ「擣衣」の歌として、

延喜十三年十月内侍屏風のうた、うちのおほせにてたてまつる

月夜に衣うつ所

から衣うつこゑきけば月清みまだねぬ人を空にしるかな

(『貫之集』一・25)

この歌は、砧の音を聞いて夫を偲び、寝ずに衣を砧で打っている女性のことが感じられるという心情で、

延喜十七年八月宣旨によりて

八重葎おひにし宿にから衣たがためにかはうつ声のする

(『貫之集』一・84)

この歌は、人の通ってこない荒れ果てた邸で誰の為に衣を打っているのだろうか、と砧の音によって寂寥感を一層強めている。これらの歌に見られるように、貫之の「擣衣」は夫を偲び衣を打つ妻の姿を想像し、その胸中を思いやる歌である。妻は夫に「逢えない」「待つ」身で、「からころも」の持つ「逢えない」という心情と「擣衣」の心情は重なるものであると考えられる。そして、これらの歌の「からころも」は単に衣の歌語として用いられたのではなく「逢えない」という心情を踏まえて用いられたと思われる。

貫之以降の「擣衣」として、勅撰和歌集において「擣衣」が秋の部立の主題になるのは『後拾遺和歌集』(1086年成立)以降であり、また、『和漢朗詠集』(1013年頃成立)の「擣衣」の和歌には貫之の「からころも」を用いた歌が採られている。

以上のように「からころも」から想起される「逢えない」という心情は「擣衣」の歌の「からころも」に踏襲されていったと考えられる。そして、恋の歌と同様に「擣衣」の歌の「からころも」も主として身に近くまとう「内衣」のことを指しているのである。

3.『源氏物語』末摘花と「からころも」

次に『源氏物語』の末摘花の用いた「からころも」について、「からころも」から想起される「逢えない」という心情を踏まえてみていきたい。

故常陸宮の姫君末摘花は、光源氏に贈った歌四首のうち、服飾の贈答に関わる三首すべてに「からころも」を用いている。「行幸」巻で「例のおなじ筋の歌」「かの人のたてて好む筋」と表現され、源氏の返歌を除いて末摘花のみが物語中で用いていることから末摘花の歌を特徴づけているのは「からころも」であり、源氏の反応・返歌から嘲笑の対象となるものであったと考えられている。末摘花は「玉鬘」巻にみられるように「古体の歌よみ」であるが、「からころも」は作者紫式部の時代でも頻繁に用いられていて、用いること自体が時代遅れ・嘲笑的になるとは思われない。では、作者はなぜ末摘花に「からころも」を用いた歌ばかりを詠ませたのであろうか。

「末摘花」巻では、年末、末摘花から源氏の正月用に晴着が贈られ、そこに、

からころも君がこゝろのつらければたもとはかくぞそぼちつゝのみ

という歌が添えられており、源氏は歌に関しても、装束に関しても「あさまし」と感じる。

「玉鬘」巻では、源氏が年末、正月用の衣裳を配り、その返礼の歌として末摘花は次の歌を贈る。

きてみればうらみられけり唐衣かへしやりてん袖をぬらして

源氏は紫上を相手に和歌の批評をして、末摘花への返歌を、

返さむといふにつけても片敷の夜の衣を思ひこそやれ

と、小野小町の「いとせめてこひしき時はむば玉のよるの衣を返してぞきる」を踏まえた歌を詠む。

「行幸」巻では、玉鬘の裳着の式に、他の女君は遠慮をする中、末摘花は装束を贈り、小袴の袂に次の歌を添える。

我身こそ恨られけれ唐衣君がたもとになれずと思へば

そして、源氏は返歌として、

唐衣又から衣からころもかへすかへすもから衣なる

という歌を詠み、玉鬘に「いとまめやかに、かの人のたてて好む筋なれば、ものしてはべるなり」と言うのであった。

末摘花が「からころも」を用いた歌を詠むのは常に装束の贈答が行われるときであり、末摘花にまつわる服飾について、一般には時代遅れであると捉えられている。しかし、「末摘花」巻で源氏の正月用の晴れ着として贈った、紅花染めの「裏表ひとしう」という古風な直衣と、それと対照的に描かれている紫上の「紅はかうなつかしきもありけり」と源氏に思われる「無文の桜の細長」という重色目がみられる表現に象徴されているように⁽³⁾、新しい感覚の持ち主として描かれる源氏と、故父宮の在世の格式を大切にしている末摘花の美意識⁽⁴⁾は異なるものであった。これは、「初音」巻で「玉鬘」巻の衣裳配りの際に末摘花に配られた「柳の桂」に重ね桂を合わせず、源氏が「襲のきぬなどはいかにしなしたるにかあらむ」と思う場面からも明らかである。

『源氏物語』の設定年代は延喜・天暦朝と考えられ、この期間は唐風から和様への過渡期と重なっている。源氏の美意識は重色目にも見られるように和様を取り入れた新しいものであり、一方、末摘花の美意識は延喜朝より前のもので、唐風影響の強いものであると思われる。そして、このような時代設定であるために、末摘花の行動・服飾・詠歌など全てにおいて感覚の違いが際立ってしまうと考えられる。末摘花の和歌の詠風では「からころも」は「逢えない」という心情を踏襲していた時期であり、源氏がなかなか訪れないため、「逢えない」「待つ」身であった。つまり、末摘花の歌には、「からころも」を用いることによって、疎遠にされる我が身が嘆かれる、という気持ちが込められているのである。ところが、源氏の和歌の詠風では、恋の歌における「からころも」に込められていた「逢えない」という心情はすでに薄れてしまっていた。そのように考えると、源氏の「からころも」を多用した返歌は、衣を返すと夢に恋しい人が現れるというが、あなたの詠む「からころも」は返しても「逢えない」衣なのである、と解釈することもできるのではなかろうか。

末摘花の「からころも」は、頻繁に用いることの滑稽さが歌の意味よりも先行して受け取られているように思われる。しかし、末摘花と源氏の「からころも」の解釈は違うものであり、作者は末摘花に「からころも」を用いた歌を詠ませることによってその感覚の違いを示し、かつ、末摘花の置かれている境遇も示していたのではないだろうか。

また、末摘花以外にも『蜻蛉日記』の作者藤原道綱母や『宇津保物語』で、兼雅に見捨てられている女三宮など、「からころも」を用いた歌を詠むこれらの女性には、自分のもとを訪れない冷淡な男性を待つという同じような境遇が浮かび上がる。「からころも」はそのような女性にとって、自分の置かれている境遇を象徴するものであった。つまり、「逢えない」「待つ」身である女性の嘆きが「からころも」にあらわされていたのである。

以上のように「からころも」から想起される「逢えない」という心情は、恋の歌では『古今和歌集』と『後撰和歌集』を境に薄れていき、次第に衣の歌語としての性格を強めていく。しかし、「擣衣」の歌の中には依然として「逢えない」という心情が残されていくように、その変遷は複雑なものとなっている。

服飾は時代と共に変化していくものであり、一つの服飾の名称と服飾の実態との間が一対一対応をなしているわけではない。その意味でも、奈良時代の唐風服飾から和様の完成された平安時代後期の服飾への変化の過程をとらえることは非常に難しい。

平安時代中期にみられる和様化は、多年にわたって流入してきた唐風伝統を残しつつ、日本の風土や嗜好にかなったものへの移行であったため、実際の服飾の和様化の過程も複雑に交錯している。歌ことばとしての「からころも」の複雑な変遷は、実際の服飾の変遷を考える上での手掛かりとなるのではないかと思われる。

(付記)本研究は、「王朝和歌における服飾表現—「からころも」をめぐって—」(『服飾美学』第29号、平成11年9月末発行予定)の内容をもとにしたものである。

[注]

- (1) 原田淑人氏は『漢六朝の服飾』(東洋文庫、1937年)で、深衣について、衣・裳二部を縫い合わせて仕立てられ、三角形の衽を深く合わせて着る服であると考究されている。
- (2) 初段、第四一段、第百七段、第百十四段など。
- (3) 紅花染めの「裏表ひとしゅう」という古風な直衣について、成田汀氏は「平安朝服飾における雜袍と直衣の諸相一重色目の成立を中心としてー」(『服飾美学』第20号、1991年)において、同系色の重ねが好まれた時代の、故父君のものと指摘され、それと対照的に描かれている紫上の「紅はかうなつかしきもありけり」と源氏に思わせる「無文の桜の細長」は重色目がみられる表現であることを述べておられる。
- (4) 小池三枝氏は、『服飾文化論—服飾の見かた・読みかたー』(光生館、1998年)の中で、源氏が末摘花の姿を初めて見た際の装束の中の「黒貂の皮衣」について、かつて高貴な身分の人にのみ着用が限られた最高級の毛皮で、故父宮の形見の品であろうと指摘され、一時代前のものではあっても、父宮の形見の衣服を着ている末摘花の姿には、気品を保った柔らかい感じもあることを述べておられる。

資料の引用は次の通りである。

『万葉集』は「日本古典文学大系」(岩波書店)に、『源氏物語』『古今和歌集』は「新日本古典文学大系」(岩波書店)に、『伊勢集』『嘉言集』『貫之集』は『新編国歌大観 第三卷 私家集編1』(角川書店)に、『白氏文集』は「漢詩大系 第十二卷」(集英社)に、「寛平御時后宮歌合」は『新編国歌大観 第五卷』(角川書店)に拠った。